

■ 特集「結い」

被災地のリレーから広域ユイへ

渥 美 公 秀

(大阪大学大学院人間科学研究科)

はじめに

「おらあ嫁に來だときい、姑さんにい、あそごの家さ、ユイっこだから行げえって、言われで行ったなんすう」

(嫁に來たばかりの頃は、姑さんに、あそこの家はユイの関係にあるから行ってこいと言われて行ったものです)

2011年秋、岩手県野田村でお世話になっている年配の方から聞いた言葉である。野田村は、岩手県北部沿岸に面する人口5,000人弱の自治体で、青森県八戸市、岩手県久慈市などとともに、東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた地域の北限に位置する。この村では、ユイは、特定の相手との間で労働を交換すること、および、その精神を指す。ユイの精神に基づいて、労働することを「ユイっこする」と表現する。ユイには、契約があるわけではなく、ユイに関わる人々が組織を作っているわけでもない。現在でも、助け合わない人に向かって「ユイの精神に欠ける」と表現したりするそうである。確かに、野田村には、互酬的行為としてのユイが存在していたことがうかがわれる。

一方、2004年の中越地震で被災した集落の1つで、筆者らがこれまで復興支援活動を展開してきた新潟県小千谷市塩谷集落でユイは存在するかと尋ねてみたところ、ユイという言葉は聞かないなあとし少し考えた後で、「ユイナシする」という言葉があると教えてもらった。これは、相手は特定されないが、何かお世話になったときに、その当人に労働でお返しをすることを指す。相手はお世話になった当人以外であってはならず、金銭で解決してはならないとのことであった。また、「カクセツ」と呼ばれる行事もあったと聞く。これは、出稼ぎに行く前に、その年の当番の家(新築した家が候補)で餅をついて、3日間飲み食いをするもので、通常、11月1, 2, 3日に行われていた。人数が多いときは、男宿、女宿という具合に別れて実施されたが、飲めば、男衆が女宿を訪問

することもあったという。「カクセツ」は、集落の住民としてのアイデンティティを高め、集落の行事等を次世代に伝える場であったと回想される。呼称は異なるが、塩谷集落にも、確かに、互酬的行為としてのユイが存在していたことがうかがわれる。

野田村でも、塩谷集落でも、かつては、こうした互助行為を通して、集落での生活が成立していたのであろう。また、そうした集落の風習が次世代に伝わるような仕組みが培われてきたことも伝統的な生活を維持するという面で興味深い。ただ、現在では、ユイ（ユイナシ）が見られることは少なくなってきたようである。ユイは、その意味が住民に理解されはするし、「ユイの精神」として人々の会話にのぼるという意味において、かろうじて、現在でも集落の生活に溶け込んでいると言えよう。

ところで、伝統的な互助行為が希薄になってきた現代において、支援行為が顕著に見られる場面がある。災害発生時である。1995年の阪神・淡路大震災以来、災害が発生すれば、多くの人々が災害ボランティアとして被災地に駆けつけ、救援活動に参加することが社会に定着してきた。災害ボランティア活動の調整を、各地の災害NPOや社会福祉協議会などが行うことも慣例化し、救援活動だけでなく、長期的な復興支援まで被災地の人々との関わりを維持して活動していく災害ボランティア・災害NPOも見られるようになったⁱ。では、伝統的な互助行為と、災害ボランティアによる支援活動とはどのような関係にあるのだろうか？

筆者は、2011年3月11日に発生した太平洋東北地震以来、災害ボランティアを研究する研究者として、また、阪神・淡路大震災を契機に兵庫県西宮市で設立された災害NPO(特)日本災害救援ボランティアネットワーク（Nippon Volunteer Network Active in Disaster: 以下、NVNAD）のメンバーとして、岩手県野田村で様々な活動を展開してきたⁱⁱ。本稿では、災害NPOが媒介となって展開された「被災地のリレー」プロジェクトを事例としながら、一見、一方的な支援活動に見える災害ボランティア活動が、広域的な結（ユイ）を織りなす可能性について検討し、災害NPOの役割を提案する。まず、ユイを含む伝統的な互助行為について、恩田（2006）の整理に依拠して概括し（第1章）、続いて、ユイを含む互助行為と災害ボランティア活動との異同を整理する（第2章）。次に、阪神・淡路大震災以来、筆者らが展開してきた事例を挿入し（第3章）、その事例の含意を「被災地のリレー」として整理して（第4章）、「広域ユイ」の可能性について論じる（第5章）。最終章では、広域ユイへと繋がる実践を展開するために災害NPOが行うべき活動を提案しておきたい。

第1章 ユイ、モヤイ、テツダイと災害ボランティア

恩田（2006）は、地域社会における自生的な互助秩序を沖縄や本土島嶼部の事例をもとに検討し、ユイ、モヤイ、テツダイの3つの理念型を抽出して、相

互の関係を周到に検討している。また、現代社会におけるボランティアにも配視し、互助に基づく社会の実現に向けて議論を展開している。本章では、恩田の議論に依拠しながら、ユイ、モヤイ、テツダイについて整理し、災害ボランティアとの対応をつけておく。

恩田によれば、ユイは、交換労働に見られるような互酬的行為である。その軌跡は、点と点の間の双方向の対称性を示す。つまり、行為者と行為者との間には、財とサービスが交換されるが、それは双方向であり、対称性が成立する。本稿冒頭でみた野田村のユイ（ツコ）や塩谷集落のユイナシは、確かに、特定の住民との互酬的な交換労働のことをさしていた。

一方、モヤイは、協働労働に見られる再分配行為である。その軌跡は、周辺から中心に向かい再び広がる集中（求心）と分散（遠心）の方向を示す。すなわち、共通の事柄（公共の事柄）をめぐって協働で労働し、その結果を参加した行為者間で分配する行為である。

最後に、テツダイは、無償労働としての支援行為であり、行為者間の財とサービスのやりとりは一方的、片務的であって非対称である。テツダイには、成員間の対等なヨコの社会関係に基づく「支援的行為」と、行為者間に「助力」格差が存在するタテの社会関係に基づく「援助的行為」に大別される。地縁によるテツダイは、住民の水平的ネットワーク（X軸）と親和性がある。血縁によるテツダイは、本家－分家などを想定すればわかるように垂直的ネットワーク（Y軸）であって、行政との関係もこちらに親和性がある。

恩田は、ユイをボランティア登録制を通した労力交換といった互酬的行為に、モヤイを善意の市民バンクなどの再分配的行為に、そして、テツダイを災害救援活動という支援的行為に対応させている。また、ボランティア精神には、伝統的なユイやモヤイやテツダイの「隣保共助の精神」が基調にあって、それは組織の形をとると言うよりも、深層部に存在する互助意識によって結びついたネットワークそのものであるという指摘（p.232）をしている。確かに、様々なボランティア活動一般を指す場合には、このような対応関係も意味をなすであろう。ここで、災害救援活動に携わるボランティアは、テツダイに対応している。事実、恩田は、「現代の（災害）ボランティアはこうしたテツダイであり、ユイのような互酬性やモヤイのような再分配性をもたない『片助行為』と言えよう」（p.9；（）内は筆者による加筆）としている。先述のように、テツダイには、住民の地縁的・水平的ネットワーク（X軸）と血縁的・垂直的ネットワーク（Y軸）がある。災害は、一時的ではあれ、両軸をともに、機能不全に陥れる。災害ボランティアは、いわば、X軸とY軸とによって張られる座標空間に引かれる正の傾きをもった直線であり、その傾きの大きさが問われる。実際、限りなく市民に近い（傾きの小さな）災害ボランティアも行政に近い（傾きの大きな）災害ボランティアも存在している。

興味深いことに、恩田は、災害ボランティアを片務的な支援行為としての

テツダイと対応させつつも、「ボランティアの行為も、また別の機会に行為の返礼を受けることがあり、双方向の奉仕活動につながるものが少なくない」(p.19)と指摘する。これは、片務的なテツダイが、何らかの過程を経て、ユイのような互助的行為へと転換することがあるという指摘である。ただ、この指摘に付された注には、「1995年の大震災で支援を受けた人たちが、他地域の被災者に対してボランティアとして積極的に支援活動をしてきた」(p.22)と述べられている。この表現が、当時支援をしてくれた特定の相手に対する支援活動を指しているのであれば、互酬的行為としてのユイとなるが、文字通り、他の地域の被災者への支援活動を指しているのであれば、支援行為として新たなテツダイが生じていることになる。ここでは、この曖昧な指摘をこのまま保留し、東日本大震災の被災地で見られた活動を検討してみる。そうすると、そこにテツダイの連鎖が、広域に及ぶユイを形成する可能性が見えてくる。そして、広範囲に広がるユイは、災害時から、さらには平常時の様々な活動においても、市民が相互に助け合う社会のあり方を垣間見せてくれる。

第2章 テツダイと災害ボランティアとの異同

本章では、災害ボランティアについて、支援する側からの議論を展開する。言うまでもなく、被災者支援は、被災者本位である。無論、被災者中心だと声高に論じることが被災者中心なのではない。被災者の傍にいたことから始まる実践こそが被災者本位だと言える。また、言語化して文字にするのであれば、被災者の視点から、支援について書くことが被災者本位である。その際、われわれは、常に被災者の声に耳を傾けつつ、それを聞き取れていないと自覚し、言語化してもその行間に込めた事柄に思いを馳せるべきである。従って、研究者や災害ボランティアが、被災者の立場に立つことなく、被災者のことをあでもないこうでもないと言語することは避けたい。以下で述べることは、このことを十分に踏まえた上で、敢えて、災害ボランティアによる支援という視点から書いていることを断っておきたい。

災害ボランティアは、被災者からの見返りなど期待しない一方的片務的な活動であるから、テツダイと対応する。しかし、災害ボランティアがテツダイと決定的に異なるのは、災害ボランティアの対象が、“少なくとも初期においては”不特定の被災者であるということである。伝統的な集落であれば、テツダイの相手は、いわば顔の見える住民であった。しかし、災害ボランティアは、不特定の被災者へと支援活動という贈与を繰り返す。災害ボランティアは、相手を特定せずに、被災された人々であれば、分け隔てなく贈与を行う。ただし、「少なくとも初期においては」と断っているのは、不特定の相手に対する活動を継続しているうちに、特定の被災者との関係が深まることもあり、その段階に至ると、今度は不特定性と対極をなす個別性が生まれるからである。かけがえのない相手としての被災者個人が立ち現れてきたとき、それは単なる個

別的な個人ではなく、かけがえのない単独性を帯びた人格としての関わりが始まる。従って、特定の災害ボランティアと特定の被災者の間で生まれた関係においては、互酬的な行為が生まれる可能性はある。ユイの発生である。ただし、これは局所的なユイである。

一方、災害ボランティアは、別のユイを生む可能性を胚胎している。このことについて、章を改めて事例をもとに考察してみよう。

第3章 事例：西宮から、小千谷・塩谷、刈羽、そして、野田、南相馬へ

筆者が、災害NPOであるNVNADの一員として被災地に赴く際につけている腕章には、「兵庫県西宮市 日本災害救援ボランティアネットワーク」と書かれている。被災地では、この腕章に眼を留めて泣き出される方に出会うことがある。「西宮からですか？ 阪神・淡路大震災の時は、何もできませんでした。それなのに、助けに来て下さったんですか。ありがとう・・・」という場面である。そういう場面に出くわすと、「いえいえ、私たちも全国の皆様から西宮で助けて頂きましたから」と応える。そして活動していると「何とかお礼をさせていただきたい」と言われることもある。そんな時は、「いえ、もちろんお礼なんて考えて下さらなくて結構ですよ。もしまたどこかで災害に遭われて困っている方々がいらっしゃれば、助けて差し上げて下さい」と応じる。

NVNADでは、新潟県の2つの地域で、救援活動、復興支援活動を通して、継続的な関係を持たせて頂いている。2004年の中越地震で3人の子どもを亡くし、49軒あった集落が20軒になった塩谷集落（小千谷市）では、今も復興に関わる活動を継続している（渥美，2011b）。また、2007年の中越沖地震で大きな被害を受けた刈羽村では、避難所、仮設住宅、自宅再建へと動いていく時間を住民や地元社会福祉協議会の方々と一緒に過ごしてきた。さらに、塩谷集落は、NVNADとの関係を踏まえて、被災後の刈羽村の住民を仮設住宅集会所に訪れたこと（渥美，2010）があり、両地域の住民は、その後も交流を続けてきている。

2011年3月の東日本大震災の際、東京電力福島第一原子力発電所が津波によって損傷し、大量の放射性物質を放出したことを知ったとき、真っ先に頭をかすめたのは、多数の人々が、命からがら救いを求めて被災地を脱出する姿であった。NVNADでは、被災地から避難される方々をどこでどう受け入れるのか、そして、避難されてきた方々への支援をどのように展開すれば良いのかということを検討した。まず、福島県に隣接する刈羽村社会福祉協議会に電話を入れた。すると、中越沖地震の時に、全国のボランティアに助けてもらったので、そのお礼をする機会だと思って待っているとのことであった。次に、小千谷市の復興支援員に電話すると、小千谷市は、福島からの避難者をまずは民泊で受け入れるとし、200軒を超える家庭が受け入れを表明したとのことであった。これだけ多くの家庭が避難者を受け入れようとした背景には、中越地震で

助けられたことへのお礼という気持ちがあったという。中越地震を経験した小千谷、中越沖地震を経験した刈羽の方々が、東日本大震災で被災された福島県の方々を支援されることを、阪神・淡路大震災を経験したNVNADから支援することにした。

発災から1ヶ月ほどが経過した頃、刈羽村では、村内5カ所の避難所に40世帯119人が避難され、避難所以外にも知り合いなどを頼って208人が避難されていた。刈羽村社会福祉協議会の方々が精力的に支援を展開され、刈羽村の住民がボランティアとして登録して、様々な手伝いをされていた。一方、小千谷市では、1週間の民泊を終え、体育館に設置された避難所生活を経て、二次避難所となった企業（越後製菓・SANYO）の寮、あるいは、市営住宅に移って行かれる流れとなっていた。小千谷市中心部から車で20分程度山に入ったところにある塩谷集落では、5月の終わりに田植えが行われる。2008年に“開校”した塩谷分校という集落有志の会では、毎年、田植え交流会を開催し、大阪大学や関西学院大学、地元の長岡技術科学大学の学生などと交流してきた。2011年の田植えには、福島から避難されている方々を田植えに招いて交流を深めた。福島からの避難者は、帰り際に、「小千谷に来て一番楽しい時間だった」という感想を述べて塩谷集落を去って行かれた。その後、福島県内に建設された仮設住宅へ戻られた避難者との交流が続き、小千谷市の有志は、福島県南相馬市に、かつて小千谷市に避難していた方々を訪ねていたり、塩谷集落では稲刈りに福島県に帰っておられた避難者が訪れたりして、交流が継続している。こうした交流の後、塩谷集落の方々が、「おらもやっとボランティアやれたいやあ（私もようやく、ボランティア活動をすることができたよ）」と笑顔で話されることが印象的である。

朝の気温がマイナス7度を記録した12月10日、野田村役場の前の駐車場に刈羽村から来たバスが到着した。刈羽村社会福祉協議会の面々と村民合わせて15名が、夜行バスの疲れも見せず降り立った。NVNADも、この日、西宮からのバスを運行したⁱⁱⁱ。筆者らは先に野田村に入り、2台のバスを迎えた。両バスには、互いに顔見知りのスタッフがいたため、バス間の事前の調整は万全で、すぐに活動が始まった。まず、刈羽村の方々が中心となり、泉沢地区にある仮設住宅で餅つきを行ったのを皮切りに、集会所での交流会、趣味の手芸について技術や作品の交換などが始まった。あれこれと細かく計画されたプログラムなどはおおよそ不要であり、刈羽村の住民と野田村の住民は、まるで以前の知り合いであるかのように会話を交わし、溶け合うような交流を展開する姿が見られた。会場には、西宮、刈羽、野田のリレーであることを示す横断幕も飾られた。

また、新潟県柏崎市の企業から協力を得て持参したお菓子は、5箇所分散されている仮設住宅の全戸に対し、1軒ずつ手渡しで配布して行かれた。どこに行っても、すぐに会話が始まり、時に、野田村の方も刈羽の方も、当時を思



写真 1

岩手県野田村泉沢仮設住宅の交流会場に飾られた横断幕

(原案では、左から、西宮→刈羽→野田と時系列に表されていたが、最終案では、訪問先である野田村を中心に置き、両側に刈羽と西宮を配置している。)

い出して涙される場面があった。夕方からは、チーム北リアス^{iv}と泉沢仮設住宅の方々とが一緒に開催してきた月例交流会と野田中学校仮設住宅で同時開催された交流会に別れて参加し、今度は「新潟の酒と岩手の酒の飲み比べだぁ」などと賑やかに交流が始まった。途中、参加者から歌は出る、思い出話に花が咲く、大いに盛り上がる中、あちらこちらで、被災体験を含む深刻な話が繰り返し広げられていたことも印象的であった。

この日の活動を通して、刈羽村からのボランティアが、野田村で被災された方々への想いを届けようと、野田村各地で懸命に活動している姿は、多くの人々の胸を打つものであり、翌朝の地元紙^vにも採り上げられた。筆者自身、2007年の中越沖地震の救援活動からずっと交流を続けてきた刈羽の方々の姿に、あの当時大変だった刈羽村が重なり、「いつか、同じ苦しみにある方々の傍に寄り添いたい」と仰っていたことが実現したことに感銘を受けていた。

ボランティアが去った後、野田村で話を聞くと、「支えてもらうばかりでは心苦しい」という声が聞こえることがある。また、「何とかお返しをしたい」という相談を受けることもある。そんな時は、ボランティアによる活動が、被災者本位ではなくボランティア本位になっていないかどうかを真摯に再検討しながら、やはり、冒頭に示したように、「もしまたどこかで災害に遭われて困っている方々がいらっしゃれば、助けて差し上げて下さい」と応じている。

第4章 「被災地のリレー」：形式と被災経験の交流

前章で紹介した事例から、形式を整理し、被災経験を交流することについて検討してみたい。まず、事例に示された被災地間の関係を図示し（図1）、その形式について把握しておく。

まず、1995年阪神・淡路大震災で被災して、全国から助けられた西宮市の団体（NVNAD）が、2004年には小千谷市、2007年には刈羽村、そして、2011年には野田村が被災した際に、支援活動を展開した。図1には、それぞれが矢印で示されている。また、2007年には、前章で紹介したように、小千谷市塩谷集落から刈羽村への訪問と交流が始まった。そこで、小千谷から刈羽への矢印が引かれている。そして、2011年、小千谷市も刈羽村も、福島県からの避

難者を受け入れた後^{vi}、小千谷市からは、福島県南相馬市へと支援活動が展開され、刈羽村からは、岩手県野田村への支援が展開されたので、それぞれ矢印で示されている。なお、矢印は、片方だけに向いている。それらは、テツダイとしての片務的な活動であるからである。

ここで、西宮を基点として、小千谷、刈羽、野田に焦点を当ててみると、西宮から小千谷へ、今度は、小千谷から刈羽へ、そして、刈羽から野田へと矢印が、リレーのように繋がっている。また、西宮から、刈羽、野田へと矢印が、リレーのように繋がっている。こうした複数の被災地を繋ぐ矢印を、「被災地のリレー」と呼んでいる。

なお、図1には、仮想の地域A、Bが書き込まれている。将来、地域A、Bが被災した場合、西宮、小千谷、刈羽からの矢印に加え、南相馬や野田から矢印が出れば、ここに被災地のリレーがまた一步進むことになる。

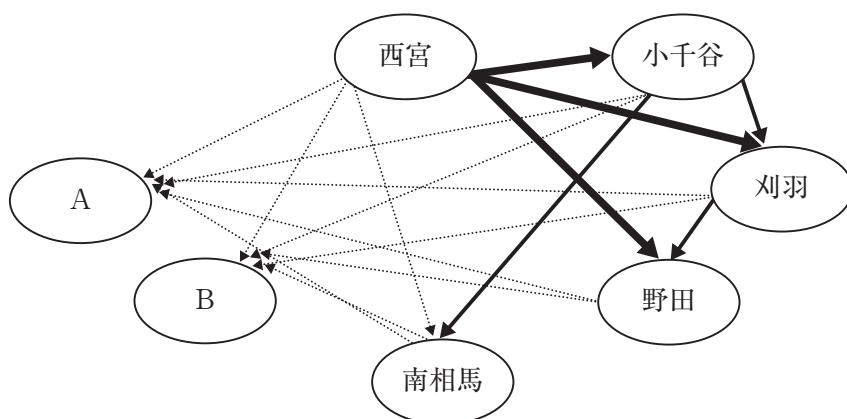


図1 被災地のリレー

次に、被災地のリレーを通じた被災経験の交流について検討する。リレーの場面を災害ボランティアの側から見ると、ただただ被災者の傍にいて、臨機応変に活動し、被災された方々に寄り添うということに尽きる。一方、被災者の側から見ると、災害ボランティアに助けられたことは、与えられるばかりだと感じられ、何か“負債”をおわされたように感じられることもある。実際、野田村では、ボランティアが帰った後に、「支えてもらうばかりでは心苦しい」という声があった。また、“負債”を返そうと考え、「何とかお返しをしたい」という相談を受けたりもしたのであった。お返しをする相手としては、支援した災害ボランティアではなく、“もしまたどこかで災害に遭われて困っている方々”が实际的であると推奨してきた。小千谷や刈羽の方々が、福島県からの避難者を待って歓待したこと、交流の後に「やっとボランティアやれたいやあ」と話す塩谷集落の方々の笑顔、そして、野田村で生き活きと活動していた刈羽の方々の姿には、あたかも“負債”をようやく返したという安堵感があったように思える。こうした“負債”の返還が、被災地のリレーの原動力の1つに

なっている。

さて、被災地のリレーを通じて、被災経験をもつ人々どうしが交流するとは、どのような事態であろうか。通常は、同じ苦しみを知っているから、同じ悲しみを体験しているからわかり合えるという風に説明される。しかし、当然ながら、両者の苦しみや悲しみは同一ではない。そもそも、特定の被災者が、特定の災害に遭遇した経緯や、その結果抱えている苦しみや悲しみについて、他者が知るよしもない。そうではなく、災害に遭遇することが、どれだけ苦しく悲しいことであるかを互いに知っているということである。さらにいえば、そう簡単には、理解してもらえない、苦しみや悲しみがあるということ、そのことを互いに知っているということである。実は、他者の痛みへの真の共感とは、「それは私にはわからない」、「私からはそこにどうしても到達できない」ということを、痛切に実感することのほうにあるという指摘がある（熊谷・大澤，2011）。こうした共感の不可能性を共感することを〈共感〉と記そう^{vii}。熊谷・大澤（2011）によれば、慢性疼痛の治療場面では、痛んでいる相手に共感して痛みを取り除いてあげようとする「痛み随伴性サポート」と、痛みとは関係のないところでサポートする「社会的サポート」がある。そして、前者は、痛みをかえって悪くすることがわかっていて、痛みに関感できないことに〈共感〉し、痛みとは関係のないところでサポートをする方が痛みが和らぐとしている。

被災地のリレーの現場で起こっていることも同様であろう。刈羽村からのボランティアが、野田村の仮設住宅に住む住民とともに涙を流すとき、そこに数年前の自分を重ねていることは想像に難くない。と同時に、刈羽村からのボランティアは、津波で多くを失った野田村の被災者を理解できると考えて、被災者の苦しみに随伴したサポートを展開したわけではない。むしろ、餅をついて味わい、手芸を楽しみ、お菓子を配り、そして、日本酒の味比べをやりながら、時を共に過ごしたに過ぎない。こうした一見、苦しみや悲しみとは関係のないところでのサポートが、被災者の癒やしに繋がることを願って活動したわけである。被災地のリレーが示唆していることは、〈共感〉、すなわち、共感不可能性に関する共感が、人と人とをより強力に、より深く結びつけるということである。

第5章 災害ボランティアを含むユイの拡大

災害ボランティアは、一方的・片務的な支援行為としてテツダイに類似していた。そして、被災地のリレーの事例が示唆するのは、災害ボランティアは、一方的・片務的な支援行為の連鎖として、被災地間を接続するということであった。簡単に想像できるように、片務的に接続された地域は、いずれ連鎖が充満し、最初の地域へとベクトルが戻って来ることがある。例えば、図1において、西宮が再度地震災害に見舞われた場合、図中の地域（の一部）は、一方

的・片務的支援行為として、西宮への支援活動を展開することになるだろうが、すでに、西宮からの支援行為を受け取っているために、結果として、双務的・互助的な支援行為となる。言い換えれば、時を経て、西宮と（例えば）刈羽の間に、互助的なユイが成立することになる。その結果、こうしたテツダイの連鎖が潜在的なユイを各地に設定することになるわけである。

しかし、テツダイの連鎖は、このこと以上に深い含意を含んでいる。ここで、図1に地域を示す楕円を全国の自治体の数だけ加えたと考えてみよう。本章で紹介してきたような被災地のリレーは、全体から見れば、実にほんのわずかな人々が関係を構築したということに過ぎない。被災地のリレーなどといっても、あまりにも地道な活動であって、日本社会全体といった大きな場には、ほとんど何ら意味を持たないように見える。しかし、テツダイの連鎖が、この社会の一部でローカルに生じると、実は、多くの人々が繋がる契機となるのである。

社会心理学者 Milgram (1967) は、われわれが、自分とはまったく縁もゆかりもない見知らぬ人であっても、わずか数人の人々を介せばその人にたどり着けるということを実験的に示した。例えば、沖縄と北海道から若者をランダムにそれぞれ一人選び、沖縄の若者(Xとする)に対し、北海道の若者(Yとする)を知っているかと尋ねる。当然ながら知らないと応えるであろうから、Xに、少しでもYを知っていそうな友達を紹介してもらう。そして、今度はその友達に、Yを知っているかと尋ねる・・・こうして友達の友達をつないでいく場合、もともと知り合いでも何でもないYへと至るには、とんでもなく多くの人々を介さなければならぬと想像できる。ところが、意外なことに、たった数人を介するだけでXとYはつながるということが示されたわけである。世間は狭いという意味の英語から、これは、Small World問題といわれている。

また最近では、Small World問題は、Watts & Strogatz (1998) がグラフ理論に基づいて数理的に検討しており、その結果はさらに示唆的である。すなわち、たくさんの点がローカルに、隣同士だけで繋がっているような状態を想定すると、遠くにある点とは隔たりが大きく、繋がるにはたくさんの点を介さなければならぬ。しかし、そこにランダムに線を数本入れる（ランダムに選んだいくつかの点と点を結ぶ）と、遠くにある点との隔たりは一気に縮まり、少ない点を介するだけで様々な点と繋がることが示されている。大澤 (2008) は、国際協力NGOをこうしたランダムな線の1つに見立てて、各地で孤立する民主主義が相互に繋がる可能性に希望を託している。

被災地のリレーも同様である。自然災害が契機とはいえ、西宮と小千谷・刈羽がつながり、岩手野田や福島南相馬がつながったということは、日本全国の様々な関係の中に、ランダムに線を引くようなものである。災害ボランティアという片務的なテツダイは、被災地のリレーという線に沿って、〈共感〉に基づく交流を推進すれば、意外に早く、双務的なユイ、しかも、かなり広域にわ

たるユイを生む。これを「広域ユイ」と呼んでおきたい。このような被災地のリレーが社会に生じていることによって、思わぬ人々が思わぬ形で互助的な関係＝広域ユイを構築する可能性が拓けてくるのである。人々は、それぞれに贈与を繰り返すだけである。しかし、それがリレーされていく。そこに、人々との繋がりを失ったといわれる現代社会における連帯の希望を見ておきたいと思う。

第6章 広域ユイの時代における災害NPOの役割

災害NPOは、被災者と緊密な連絡をとって、災害ボランティアに対し、様々な活動プログラムを準備することを重要な活動としている。ここまで示してきたように、災害ボランティアが片務的な支援活動であるテツダイを推進することによって、結果的にユイが拡大する可能性があり、テツダイの連鎖が社会に連帯をもたらす可能性まで見据えたとき、災害NPOが果たす役割はますます重要になる。では、災害NPOは、何をすれば良いだろうか。

災害NPOは、広域ユイを念頭に置きつつ、今こそ、被災者に寄り添い、そのことの重要性を災害ボランティアの皆さんに感じてもらえるようなプログラムを準備して、徹底的にローカルに実践することが求められているのではなかろうか。言い換えれば、贈与の連鎖を念頭に置きつつ、不特定な他者への贈与として始まる災害ボランティア活動を単独性に基づく活動へと変換していくことが求められよう。図1に示した連鎖が希薄であれば、リレーは、成立しない。従って、特定の被災地や被災者を支援すると決めたのであれば、徹底的にそこに寄り添う活動を展開することが肝要である。そうすれば、ローカルな片務的支援行為として始まったテツダイも、いずれは広域に拡大されたユイとして戻って来るだろうし、被災地のリレーとして展開されるテツダイの連鎖が、社会全体という場で、意外なほど早く、連帯をもたらす可能性がある。

恩田（2006）は、「現在のボランティア社会化がかつての互助行為を呼び起こすものであるなら、それは古き良き伝統を通して現代社会を問い直す好機となる」（p.443）と指摘している。本稿が示してきたのは、その意味が、テツダイの連鎖による広域ユイの成立、および、社会に連帯を生じることにあった。冒頭に示したように、もはやユイが精神としてしか残っていないのが現実ではあっても、そこから得た示唆をもとに、現状を分析し、新しい互助の関係を編み上げていく実践が被災地の復興に繋がるものと考えたい。

熊谷（熊谷・大澤，2011）は、次の言葉で大澤との対談を締めくくっている。「不安や痛みを、早急に物語化して鎮痛するのではなくて、仲間の声を聴くこと、仲間に声を発することから始めるしかないのではないか」。このことは、東日本大震災の被災地と関わるわれわれにもそのまま当てはまることである。本稿では、ユイやテツダイに注目して災害ボランティアの活動を位置づけてみた。このことを念頭に置きつつ、研究者として、そして、災害NPOに関

わる者として、これからも被災者やボランティアの声を聴き、そこに向けて声を発していくことにしたい。

参考文献

- 渥美公秀（2008） 災害ボランティアの14年 菅磨志保・山下祐介・渥美公秀（編）災害ボランティア論入門 弘文堂, 86-105.
- 渥美公秀（2010） 災害復興過程の被災地間伝承：小千谷市塩谷集落から刈羽村への手紙 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 36, 1-18.
- 渥美公秀（2011a） 災害ボランティア、ボランティアの動機、ボランティア元年、災害ボランティアセンター、秩序化のドライブ、足湯隊、ボランティア論 矢守克也・渥美公秀（編著） 防災・減災の人間科学 新曜社, 144-178.
- 渥美公秀（2011b） 災害復興と協働想起：二十村郷盆踊り大会の事例 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 321-340.
- 渥美公秀（2011c） 東日本大震災における災害ボランティアが拓く可能性 部落解放研究, 193, 32-42.
- 熊谷晋一郎・大澤真幸（2011） 痛みの記憶/記憶の痛み：痛みでつながるとはどういうことか 現代思想, 39-11, 38-55.
- Milgram, S. (1967) The small-world problem. *Psychology Today*, 1, 60-67.
- 恩田守雄（2006） 互助社会論：ユイ、モヤイ、テツダイの民俗社会学 世界思想社
- 大澤真幸（2008） 不可能性の時代 岩波新書
- Watts, D.J., & Strogatz, S.H. (1998) Collective dynamics of "Small-world" networks. *Nature*, 393, 440-442.

-
- i 阪神・淡路大震災以降の災害ボランティア活動に関する歴史的経緯は、渥美（2008、2011a）などに詳しい。
- ii NVNADは、復興過程までを射程に入れた長期間に亘る活動を展開しており、その概要は、渥美（2011b）や、NVNADのブログ（<http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/544>）を参照されたい。
- iii NVNADは、それまで、毎月1回程度、ボランティアバスを野田村へと運行してきており、この日は第12回目のバスとなった。
- iv チーム北リアスは、東日本大震災を承けて、NVNADなどが現地で結成しているネットワーク。詳細は、渥美（2011c）やNVNADのブログを参照のこと。
- v 岩手日報2011年12月11日朝刊。なお、その記事は、新潟県の地元紙新潟日報にも転載された。
- vi ここでは、被災地の人々を自らの地域に受け入れるという重要な活動については、議論を単純化するため、あえて図に描いていない。
- vii 〈共感〉は、何も災害による苦しみや悲しみでなくてもみられる。例えば、恋心の痛みは、自分にとっては、決して他人には理解できない（されたくない）ほど私的な痛みであるが、そういう痛みを経験している人が他にもいることだけは共有している。また、死は、決して共有されないということだけが人々に共有されている。共感不可能性を共感することが、痛みや悲しみを和らげることは、大変示唆的である。